優秀賞

「ぶたばあちゃん」を読んで

荒川区立汐入東小学校五年
佐藤　花音

柳田邦男先生こんにちは。

先生は、「最後」という言葉を聞いて、何を思いうかべますか？私は、「ぶたばあちゃん」という本を読んで「最後」について深く考えました。

これから、私の考えを先生にお伝えします。

「ぶたばあちゃん」という本は、ぶたばあちゃんと孫が、ぶたばあちゃんの死ぬ前の最後のしたくをする話です。

ぶたばあちゃんと孫は最後まで、ずっと一緒にいました。私は、この本を読むまで、人は生きているのが、ごくふつうのことだと思っていました。しかし、「死」とはいつ来るかわからないものということをこの本で知りました。命があれば、その命には必ず「最後」がある。なので私は、最後までこの命をあますことなく使いきるのは、とてもすばらしいことだと思いました。そしてこれからは、今の命があることに感しゃして、一日一日を大切にして、すごしていきたいと思いました。

ある日とつぜん、ぶたばあちゃんが死んでしまうと分かった孫は、とても悲しみました。ですが、ぶたばちゃんは笑顔でした。私は、このようなぶたばあちゃんをみて、優しいうそをついているようにみえました。本当は、自分が一番こわいはずなのに笑顔で平気な顔をしていました。私は、優しさというものがとてもすばらしいと思いました。

私のここまでの考えを見て、先生はどう思いま

したか？私は、人生のこれからを最後まで全力でいきようと思いました。そして、毎日生きていられていることに感しゃしようと思いました。

～柳田邦男先生からのメッセージ～

小学生くらいの子どもが「死」というものについて、しっかりと考えるということは、ふだんはほとんどないですよね。でも、自分にとって大切な家族の誰かとか同じクラスの友達の誰かが病気や事故で亡くなったら、ショックを受けるでしょうし、《死ぬってどういうことなんだろう》と考えるようになるでしょう。

実際にそういう不幸なことが起こらなくても、読んだ本の中でそういう場面があると、「死」というものについて考えさせられるでしょう。佐藤さんは、『ぶたばあちゃん』という本を読んで、「『最後』について深く考え」たのですね。「最後」とは、人でも動物でも、生きている命の「最後」ですから、「死」のことですね。

佐藤さんは、これまでは生きていることに終わりがあるとは考えてもみなかったということですが、十歳や十一歳の子どもだったら、そうでしょう。でも、『ぶたばあちゃん』を読んで、「命には必ず『最後』がある」と気づいたのですね。

しかも、そう気づいただけでなく、「今の命があることに感しゃして、一日一日を大切にして、すごしていきたい」と思うようになったというのです。その考える力は、すばらしいですよ。

さらに佐藤さんは、「死」が近いことを知ったぶたばあちゃんの心のなかまで深く考えたのですね。

それは、ふつうの子どもには、なかなかできないことです。佐藤さんの推測では、ぶたばあちゃんは「死」を前にしてこわいはずなのに、「笑顔で平気な顔」をしていたのは、孫を悲しませないための「うそ」の顔であって、そういう「うそ」は、心の「優しさ」から出てきたものにちがいないというのですね。私もそう思います。

本を読んで感動しただけでなく、主人公がなぜ感動的なことをしたのか、その心のなかまで想像し考えてみるという努力を、私は「本の深い読み方」と呼んでいます。そういう読み方を身につけると、若者向けの小説などもどんどん読めるようになり、心が豊かになるでしょう。